

266 先端巨大症における甲状腺画像診断

笠木寛治、田淵達也、宮本信一、アラム・モハメド・サイド・ウル、御前隆、阪原晴海、小西淳二（京大核）島津章（京大二内）

先端巨大症では甲状腺腫を有する患者が多いことが知られており、甲状腺増殖刺激物質であるIGF-1の病因的役割が示唆されている。そこで本症患者において甲状腺の画像診断を行なった成績を報告する。対象49例中、甲状腺腫を触知しない8例と小さなびまん性甲状腺腫を触知した12例を除く29例においてUSを施行したところ、15例でびまん性甲状腺腫（うちパセドウ病1例）、13例で腺腫様甲状腺腫、1例で単発性結節の診断が得られた。Tc-99mまたはI-123による甲状腺シンチグラフィーを行なった18例のうち、11例でRIの不均一分布（うち4例ではhot lesionまたはcold lesionあり）、4例でRI集積低下像、3例で正常像が認められた。先端巨大症の甲状腺は画像診断上多彩な病像を呈する。

267 非イオン性造影剤のラット甲状腺放射性ヨード摂取能に及ぼす影響(第2報):甲状腺ペルオキシダーゼ活性への影響

中駄邦博、望月孝史、鐘ヶ江香久子、加藤千恵次、塚本江利子、伊藤和夫(北大核)

われわれは以前の本学会で非イオン性造影剤(NICM)投与後のラット甲状腺放射性ヨード摂取率(RIU)は約2週間で回復すると報告した。このとき、ラットの甲状腺内のヨード濃度(TIC)値は投与後1日で前値に復するため、TICの変化以外にもRIU抑制に関わる因子があると思われる。そこで、NICM投与後の甲状腺内のペルオキシダーゼ(PO)活性の変化を検討した。NICMとしてiopamidol 500 mgI/kg. b. w. を静脈内投与したときに甲状腺PO活性は投与後少なくとも3日間抑制された。また、PO活性の障害は投与されるNICMの濃度に依存性があり、RIUの抑制においてTICの変化よりも重要な意義があると考えられた。

268 結節性甲状腺腫の鑑別診断における²⁰¹Tlと^{99m}Tcの2核種シンチグラフィの有用性に関する検討

奥村能啓、清水光春、佐藤修平、新谷直道、原田義弘、新屋晴孝、竹田芳弘、平木祥夫(岡山大・放)

²⁰¹TlClと^{99m}TcO₄⁻による2核種甲状腺シンチグラフィを行い、手術にて組織診断が確定した結節性甲状腺腫56例を対象とし、主として良・悪性の鑑別における2核種シンチグラフィの有用性についてretrospectiveに検討した。²⁰¹Tl初期像等で等・高集積、^{99m}Tcで欠損像を示した50例中、癌が28例(56%)、良性腫瘍が21例(42%)、悪性リンパ腫が1例(2%)であったが、²⁰¹Tlの集積の程度が強い例や後期像でも高集積が残る例は癌が大部分であった。²⁰¹Tl、^{99m}Tcともに欠損像を示した6例は全て良性腫瘍であった。²⁰¹Tlの初期、後期像の集積の程度を評価することで結節性甲状腺腫の良・悪性の鑑別が可能と考えられる。

269 分化型甲状腺癌転移58例の¹³¹I内用療法

川崎幸子、佐々木真弓、中野覚、高橋一枝、西山佳宏、佐藤功、田邊正忠(香医大放)余田みどり(大川総合放)

1984~1994年の11年間で58例の転移症例の治療を行いこれらの¹³¹Iの集積度や治療効果に影響する因子について検討した。男:女比14:44, 年齢11~80(平均52)才、組織型は乳頭癌48例、濾胞癌10例である。頸部・縦隔リンパ節(LN)16例、肺(P)33例(P+LN 23合併例を含む)骨(B)9例(B+P 2, B+P+LN 2 合併例を含む)の87病変で術式は全摘45例、亜全摘・部分切除13例である。方法、投与量は当院プロトコールに準じた。転移部位別、組織型、年齢で集積度を検討した結果、良好な集積を示したのは骨、濾胞癌、40才以下の若年者であった。しかし、治療効果は40才以下の肺転移例(LN合併の有無にかかわらず)が最も良好で初回投与日より算出した平均生存期間も長かった。

270 放射性ヨード大量療法における小核試験を用いたリンパ球の放射線障害に関する検討

渡辺直人、瀬戸光、清水正司、柿下正雄(富山医薬大放)横山邦彦、道岸隆敏、利波紀久、久田欣一(金大核)

放射性ヨード大量療法は、甲状腺癌患者に広く適応されている。今回我々は、放射性ヨード大量療法における放射線の影響を評価するために、小核試験を用いてリンパ球の放射性組織障害を検討した。対象は甲状腺分化癌と診断された術後患者25名である。I-131(3.7GBq)投与前及び投与後一週間に患者より採血、リンパ球を遠心分離し用いた。リンパ球の小核試験については、Fenech及びMorleyの方法に準じて施行した。二核細胞500個当たりの小核細胞数は、前では 5.40 ± 1.42 (平均±標準偏差)、一週間後 15.7 ± 2.73 で有意の増加を認めたが、軽度であった。放射性ヨード大量療法におけるリンパ球への放射線の影響は小さいと考えられた。